様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２２３６

研究課題名（和文）近代日本における「古代」の歴史化と美術に関する研究－国家表象と国宝を中心に

研究課題名（英文）Research on the Historicisation of Antiquity and Art in Modern Japan with a Focus on Representations of National Identity and National Treasures

研究代表者
林　みちこ（Hayashi, Michiko）

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：４０８０５１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本が近代国家としての体制を確立するため、西欧文化が源流として位置づけた古典古代に倣い自国の「古代」を歴史化したことを美術史の視点から検証したものである。明治後半期の国家神道成立の時期に創出された国家表象としての女神像の変遷と消滅、また万国博覧会および国際博覧会において日本が歴史の視覚化に重点を置く中で特に国宝が担った役割が明らかになった。背景として藩閥官僚から学士官僚への移行期における内務官僚の美術行政・対外美術戦略への関与も確認できた。以上より美術を通した古代と近代の結節点を具体的に示したことが本研究の主たる成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで明治後期に隆盛した歴史画の画題としての古代イメージについては研究がなされてきたが、近代日本における古代の表象に関する包括的な検討作業は未着手であった。そこで本研究では美術行政、美術を通した外交戦略、国家神道の形成と国家表象などを関連づけ近代日本における美的な「古代」の意味を探った。本研究により、これまで緊密に連携していたとはいえない近現代美術史研究と日本古代史研究を接続させることができた。世界的に自国第一主義、新しいナショナリズムのうねりが見られる現在、戦後に脱構築された古代神話のイメージを視覚芸術の歴史から再び読み直すことは重要である。

研究成果の概要（英文）：This research examines Japan's historicisation of its own Antiquity from the perspective of art history, on the premise that Western culture had positioned antiquity as its origin to establish itself as a modern state. The research clarified the transition and disappearance of images of goddesses as representations of the national identity created in the latter half of the Meiji era, during the establishment of national Shintoism. The research also explained the role of national treasures at the world expositions and international exhibitions, while Japan emphasises visualising history. In addition, the involvement of the bureaucrats in art administration and foreign art strategy was also confirmed during the transition from the clan bureaucracy to the academic bureaucracy around the late Meiji era. The main result of this research is that it concretely shows the node between ancient and modern times through art.

研究分野：日本近現代美術史

キーワード：日本近代美術史　国宝　文化財行政　博覧会　古代神話　国家神道　美術史学史　女神像

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は明治政府による美術を通した外交戦略について、これまでに発表した研究において 1910 年（明治 43）日英博覧会の出品をもとに分析している。その中で、万国博覧会を中心とする国際博覧会で日本政府が海外に誇示しようとした日本イメージの中心に「歴史の厚み」すなわち「古代から連綿と続く歴史を視覚化すること」があったことを実証した。

(2) 近代日本の国家意識については、T・フジタニ（1994）が天皇制や国家神道を近代になって創り出されたものであると分析したほか、高木博志（1997）は明治期に始まった国による文化財保護が天皇制の文化的統合機能の一端であると跡づけている。美術史の分野では、佐藤道信（1999 年）の論考が美術史と政治経済史を結びつけた初めての研究であり、美術行政、殖産興業に関わった内務省、農商務省、文部省についての鋭い分析は、研究代表者が本研究の主題に迫る手段として官庁の研究、特に内務省に着目するきっかけとなった。

(3) 木下直之の論考（1993、2002）で鮮やかに浮かび上がったのは、我々が自明のものとしているモノや事が明治以降につくられたこと、すなわち身のまわりの記念碑、祭りや信仰の対象までもが、明治期の国民国家形成と江戸以来の見世物文化の混然となったこの 100 年ほどの間に生まれ、消えて行ったという事実であった。このように従来の常識を打破した論考は研究代表者にとって、古代をモティーフにしたジオラマや活人画の研究への動機づけになっている。

(4) 国家神道については井上寛司（2011）が考察したとおり、明治以降に形成された国家神道は 1908 年（明治 41）に発布された「戊申詔書」に基づき行われた地方改良運動と密接に関係していることが明確になっている。このことは明治後期に女神像が創出されたということについて研究代表者の理論的裏付けとなった

２．研究の目的

(1) 近代日本が「古代」を歴史化しなければならなかった理由を考察することで、現在の日本において古代がどのように理解され、表象されているのかがあぶり出される。以上のように象徴・表象としての古代イメージを絵画にとどまらず様々なメディアから抽出し分析することで近代以降の美的な「古代」の様相を明確にすることが本研究のねらいである。

(2)国家の擬人像は西欧においては現在でも国家表象として使用されている。しかし日本においては国家を表象する擬人像は存在しない。本研究では明治期に一時的に創出された女神像「やまとひめ」がその後消滅した背景を国家神道との関係から解明しようと試みた。

(3)明治に入り壬申検査から始まって古社寺保存会の設立、国宝指定という文化財保護の流れはすでに日本近代美術史の要諦として認知されている。しかしこの過程で内務官僚が美術史家としても活動していたことや、藩閥官僚から学士官僚への移行期についてはまだ研究の途上にある。本研究は日本の国家意識と美術行政、外交戦略を官僚の事績や官僚の美術史観から解明することを目指した。

　以上のとおり本研究の目指すところは、これまで研究領域として交叉することのほとんどなかった近代美術史と古代史との結節点を探ることである。

３．研究の方法

本研究では主に次の 6 点の調査研究を行い、日本の国家意識の形成について考察した。

①国家表象としての女神像「やまとひめ」の図像的源泉、商業美術への応用をまとめた。

②「やまとひめ」の着想源となった倭姫命の伝承と、それを祀る伊勢神宮別宮の倭姫宮の創建を古代史・近代史を横断しながら考察した。

③万博におけるジオラマや活人画などいわゆる見世物にあらわれた古代イメージを考察した。

④国家神道の成立と解体について戊申詔書、GHQ/SCAP の神道指令が視覚イメージをどのように統制したかを解明した。

⑤国宝の指定、展示、出版、日本美術史の成立を「古代」をキーワードとして包括的に考察した。

⑥国宝指定、博覧会等の美術行政に携わった官僚の事績を調査した。

４．研究成果

(1) 三重県の伊勢神宮を調査し、別宮である倭姫命宮およびその周囲にある伊勢神宮徴古館・農業館を視察した。近代以降に整備された文教地区に倭姫命宮を置いた意義を地誌的にも確認でき意義深い調査となった。併せて斎宮歴史博物館を訪問し斎王としての倭姫命について調査し、伊勢全域を舞台とした明治後半から大正期の古代イメージの醸成を明らかにした。

(2) ロンドンのテート・ブリテンおよび帝国戦争博物館にて調査を行い、戦争に関連した帝国の表象、具体的には英国の擬人像である女神ブリタニアの図像がどのようなメディアに表れているかを分析した。上記(1)(2)の研究成果をまとめ、台北の国立台湾師範大学にて *The Politics of Goddesses: Britannia, Marianne, and Yamato-hime* を口頭発表し、国家を表象する女神像の各国での差異について論じた。その際の質疑応答で、特に西欧では二女神の「シスターフッド」が図像としてよく見られることを指摘され、今後の課題とした。

(3)日英博覧会開催にあわせた出版物『特別保護建造物及国宝帖』(1910 年)英文版である *Japanese Temples and Their Treasures, 1910 " Part II. Sculpture, Painting and Allied Arts — General Outline"*の現代日本語訳を完成し報告書としてまとめた。当該の英文は岡倉覚三(天心)によるものとされる。岡倉覚三 (天心) による美術史の叙述を手伝っていた弟子たちの存在はこれまでも指摘されてきたが、『国宝帖』を読み込み、関連する書簡等の記録も参照することでより明確になってきた。特に本研究では平子鐸嶺の基礎資料の収集と分析も進めた。この研究を通して解明できたのは、岡倉の英文著述が、弟子たちによる日本美術史の日本語による基本的な叙述を英語でパラフレーズし、内容を膨らませていく豊かで創造的な作業であったということである。

(4) 国家神道の成立と解体について戊申詔書、GHQ/SCAP の神道指令が視覚イメージをどのように統制したかを解明した。神道指令については基本文献として大原康男による著作と論文をすべて読み、考察した。さらに欧米の最新の研究動向としてジョナサン・レイノルズ、ルー・ジーの論文を検証、また当時の資料として神道指令立案に関わったバンス、ウッダードの著述も分析した。また国立公文書館の資料 (アジア歴史資料センターの公開資料) より神道指令の最初の日本語訳において「symbol」が「表象」と訳されていたことを発見し、その後「象徴」に変わるに至ったことが明らかになった。このことは神道の視覚的イメージを「表象」というモノに即した言葉から「象徴」という抽象度の高い用語に置き換えたことを示しており、美術史の方法論で神道に関する史料を読み直すことの必要性を認識した。

(5) 近現代における古代イメージの表象については、対象とする時代を明治期から昭和期に広げ、太平洋戦争の戦時下において髪型の提案として古代の結髪「みづら」が提唱された事例を調べ、服飾や美術における復古趣味と国民総動員のイデオロギー上の繋がりを発見した。当該の論考は『考古学ジャーナル』に発表している。

以上、本研究により美術を通した古代史と近現代史の結節点を確認し、当初の目標に到達することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 林 みちこ	４．巻 744
２．論文標題 戦時下の日本における「みづら」と古代	５．発行年 2020年
３．雑誌名 月刊考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林 みちこ	４．巻 129-5
２．論文標題 2019年の歴史学界－回顧と展望－日本（近現代）18美術	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 190-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林みちこ	４．巻 28号
２．論文標題 資料紹介 石橋和訓氏肖像画会について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 近代画説	６．最初と最後の頁 150-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Michiko Hayashi
２．発表標題 The Politics of Goddesses: Britannia, Marianne, and Yamato-hime
３．学会等名 National Taiwan Normal University Guest Lecture（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 林みちこ	4．発行年 2020年
2．出版社 筑波大学芸術系 林研究室	5．総ページ数 155
3．書名 令和元年度研究報告書 Japanese Temples and Their Treasures, 1910 “PartⅡ. Sculpture, Painting and Allied Arts－General Outline” 文体の考察と試訳 vol. 3	

1．著者名 林みちこ	4．発行年 2019年
2．出版社 筑波大学芸術系 林研究室	5．総ページ数 102
3．書名 平成30年度研究報告書 Japanese Temples and Their Treasures, 1910 “PartⅡ. Sculpture, Painting and Allied Arts－General Outline” 文体の考察と試訳 vol. 2	

1．著者名 林みちこ他（桑原羊次郎・相見香雨研究会編）	4．発行年 2018年
2．出版社 松江市歴史まちづくり部	5．総ページ数 担当部分8頁（総頁数58）
3．書名 郷土のエンサイクロペディア 桑原羊次郎（松江市ふるさと文庫21）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関